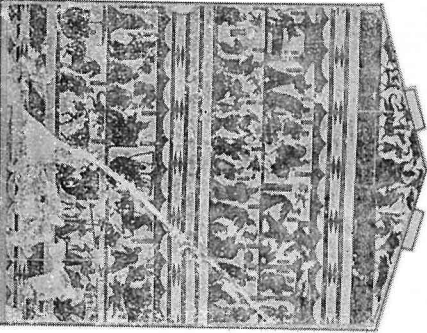
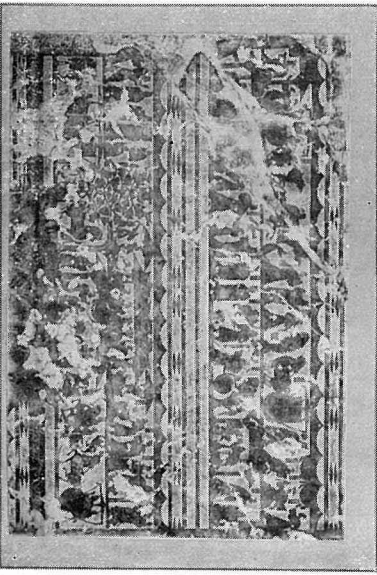
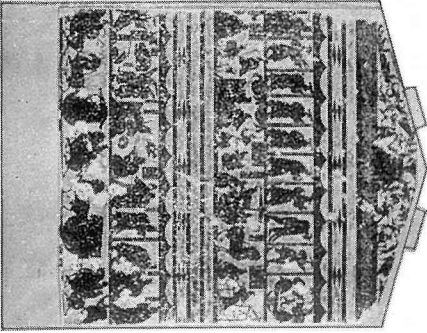
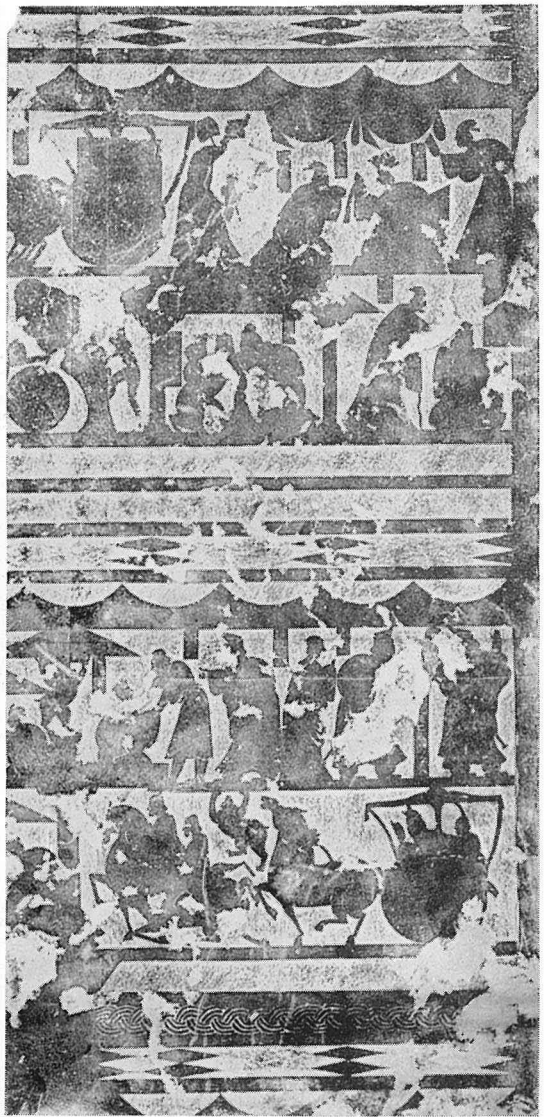
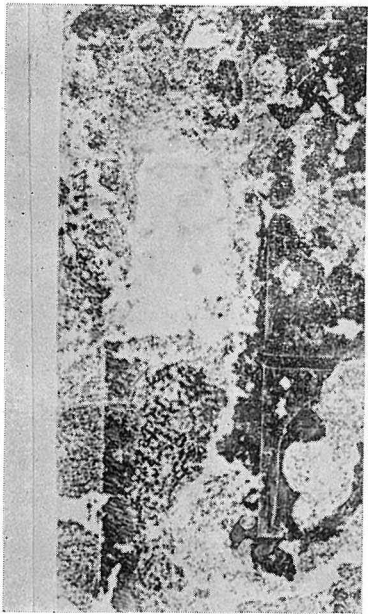
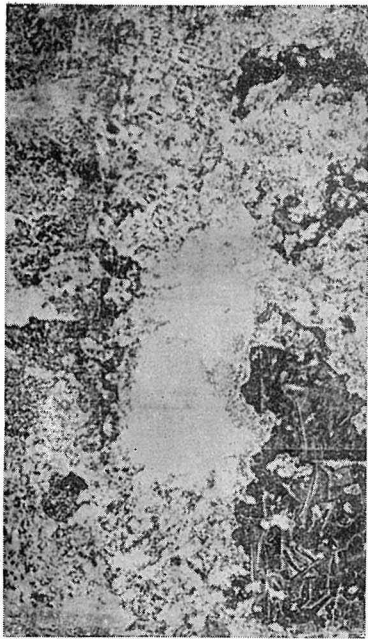


図版 1 武梁祠堂画像
 右 武梁第一石 (芸大本) 中
 上 祥瑞第一石 (早大図書館
 本, 以下同じ) 中中 祥瑞第
 二石 中下 武梁第三石 左
 武梁第二石 外枠は関野博士
 実測図による石の外形 (柄は
 補ってある)

0 50 100 cm





0 50 cm

図版 2 早稲田大学図書館蔵拓本(細部) 右 武梁第三石 左上 祥瑞第一石
左下 祥瑞第二石(いずれも部分)

武梁祠堂復元の再検討

秋 山 進 午

【要約】漢代画像石のうちで武氏祠画像石群は古来最も著名である。だが、従来の研究は主として画像の主題にむけられ、黄易による新祠堂中にバラバラに保存されている諸石を組立ててもどの祠堂に復元する試みは始まったばかりといっている過ぎではない。従来の研究のうち最も秀れたものはフェアバンク夫人による論考であるが、ここに取上げる武梁祠堂に限っても精しく検討するとその復元に従いがい難い点がある。第一に今手に入る拓本は決して石の全形を示すものではない。文様帯や何も彫られていない所まで含めてこそ始めて真の復元になる。奥壁を両側石で挟むフェアバンク夫人の復元を改めて奥壁前面に側石を置いたのはこの観点による。第二に新中国の精密な孝堂山石祠の再調査によって神台石の存在が明確になり武梁祠にもそれを加えた。第三に早稲田大学図書館蔵拓本の発見によって天井石の細部の構造が明らかとなり「石索」にいう「有方孔二」の方孔が枘穴であることを確定した。これによってフェアバンク夫人の復元図にある中央の石柱は誤りで、前面吹放しの構造であることが確かめられた。

一 はじめに

石の芸術の宝庫とでもいおうか、山東省には以前から画像石が数多く発見されてきた。解放後にも沂南画像石墓のような素晴らしいものがおなじ山東省から発見されている。そしてこの石の芸術の領域は新中国の数々の考古学的調査

の進展によって今では陝西省から河南省、江蘇省に及ぶ範圍にまで広がっている。^①

だが、それらの数多くの画像石のなかで、もつとも精妙なものといえ、それはやはり武氏祠画像石群に指を屈せねばなるまい。画像の主題の豊富さといい、彫られた刻文の秀麗なことといい、又その彫法の巧致なことといい、ま

さに「名石を撰び、良匠衛改をして、文を彫り、画を刻せしめ、技巧の粹をつくし、もつて後嗣に示さんとした」。

と誇るにふさわしい、一つの頂点を示すものなのである。

けれども、この武氏祠画像石群をめぐる様々な問題にはなお未解決のものが数多くある。

従来最も論議の対象となつた画像の主題をめぐる問題の解決はもとよりのこと、各祠堂とその被葬者の比定、祠堂建築の復元、更に各祠堂相互の配置の復元などの重要問題も解決とはほど遠い状態にあるといつても決していい過ぎではあるまい。

すでに公表されている数々の諸先学の業績の驥尾に付して、この小論では主として画像祠堂、それもいわゆる武梁祠堂^③の復元的考察を取上げることとする。

武氏祠堂群の復元にはすでにフェアバンク夫人のすぐれた論考^④があつて各祠堂の精密な復元が行なわれている。殊にここで取上げようとする武梁祠堂のごとく、僅か三石、それに天井石二石をいれても五石から成るのみのこの祠堂復元のごときはことあらためるまでもない観があるかもし

れないが、精しく検討すれば細部においてなお幾つかの問題を含んでいるように思われる。ここに再検討を行なつて今一步の進歩を期する所以である。

二 復元の方法

武氏祠、特に武梁祠の諸石は古く宋代の著録があり、以降、中国の金石学者はもとよりのこと、シャバンス、大村西涯、関野貞氏等の碩学による数々の論考がある。だがここで問題とする祠堂建築の復元については論及しているものが数少ないのは、フェアバンク夫人の指摘するように、従来の研究が多く傍題による画像の主題の解明に主眼をおいていたことをはじめとして、各石があまりに錯雑していること、比較すべき手掛りが少ないことなどがその理由であらうか。それに発掘が古く清朝初期に行なわれ、出土の状況等が不明であることも復元の意欲を殺いだ一因でもあらう。

一九四一年に発表されたフェアバンク夫人の「武氏祠堂の復元」^④は現地調査をふまえて、各々の石室の原石に最も近い拓本を蒐め、それを同一縮尺の写真にして机上の操作

に便利ならしめる方法によって各祠堂の復元を試みたものである^⑧。特に前石室、左右室の復元には関野博士の孝堂山下小石祠^⑨などを材料として、後壁の中央下部に *roccos* を設け、ここに問題の宴享画像石を配した著眼は見事なものである。

だがこのフェアバンク夫人の研究も細部にわたって仔細に検討すると、そこに何程かの問題点をあげることが出来る。

フェアバンク夫人の論考で最も特徴的なのは各石のできるだけ完全な拓本を抄して、それによって復元の操作を行なった点にある。けれども拓本はあくまで拓本であって原石と異なるのはいうまでもあるまい。職業的拓工の仕事は、傍題を付した画像の部分だけが鮮明に写せればいいのであって、画像の上下の単なる文様帯や、ましてその外側の画像のない部分のすみずみまでも拓影を及ぼすのは材料といひ、労力といひ極めて無益なことなのである。シャパンヌ、関野博士等はすでに早くこの点に留意して拓本の集録に当られ、ことに関野博士の選ばれた図版には上下の文様帯まで録した拓本が特に多数見られるのはさすがである。

だが資料は拓本ばかりではない。関野博士の著書にはちやんと黄易等によって建てられた新祠堂中におさめられている各石の実測図が載せられている^⑩。

今一寸、この実測図とフェアバンク夫人による復元図とを比べて見よう。

フェアバンク夫人による前石室の復元^⑪は東壁が前二石と前六石、西壁が前五石と前七石で構成され、奥壁は最上層に三角石梁石（前八・九石）を挟んで前一石と孔子見老子画像石が左右に並び、その下を横長の前四石で支え、下部中央に前三石を置いてその左右を柱状の前十一・十二石と前十三・十四石で挟み、最下段を前十石と前十五石とで構成している。

所で関野博士の実測図によって東西の側壁と奥壁の高さを当って見ると、前二、前六石を重ねた東壁左端（ここに奥壁が接する）は合計五尺八寸九分に対し、奥壁各石の合計は六尺二寸から三寸になり、そこに三寸ないし四寸、十、十三、十三に及ぶ高さの違いが出来るのである。だからといってフェアバンク夫人の復元を間違いだと速断するものではないが、何とかこの差を説明しなければなるまい。同じこ

とを武梁祠堂の三石について見ると、西壁をなす第一石の左端の高さが五尺四寸二分であるのに対し、奥壁をなす第三石の高さは五尺四寸三分でその差は一分、三耗に過ぎなく充分信頼出来る価を示している。

武梁祠堂で見られるとおり、画像を主体としたこれらの祠堂は極めて精密な画面構成を持っている。各段の画像の列はただに整然と同じレベルに並んでいるだけでなく、石から石へまたがって一つの画面構成をなしているものもあるし、文様帯も祠堂の端から端へ連続して並ぶ様に意図されている。だから各段の画像が一段とまでゆかなくとも、半段あまりも喰違ったり、連続文様が一部分だけ欠けるといふ様な復元はいささかふにおちないものがある。拓本のみからする復元にはこうした欠点があることを指摘しておこう。

そう簡単に処理出来ない「石」を材料としたこれらの祠堂の復元に当っては、拓本によって知られる画像や文様帯をまず原石のうえに定着させる仕事から始めねばならない。関野博士の実測図によって石の外形寸法が知られるから、それによって拓本になつていない部分があればあるかが

判る。

こうしてまず各々の「石」を復元したのち、それらを組合せて祠堂に復元してみよう。つまり拓本だけでなく、拓本になつていない部分をも含めて石全体を考察してこそ始めて真の意味の祠堂の復元となるという立場から検討を試みたのがこの小論なのである。

三 復元の材料

画像祠堂の復元に当ってフェアバンク夫人が最も苦心をばらったのは良い拓本を集めることであつたといふ^⑥。ここで良いといふのは拓法が精密であるといふことの他に、出来るだけ「石」全体を完全に近く写したという意味である。

画像の主題を研究するためだけに従来手に入る拓本で、その拓法の良し悪しはあつてもそう不自由でもないであらう。しかし、復元的に石全体を問題とする場合には、画像の他に、少なくとも上下辺の文様帯までは逸することの出来ない大事な要素なのである。しかもそうした注文にあてはまる拓本は実にすくない。この小論で取上げるのは武梁祠堂であるから次に各々の石の資料を挙げてみよう。

ただここでは復元を主として追求するのであるから画像の部分には触れないで、拓本の左右の端とか、上辺、下辺の文様帯やその外側の画像のない部分までを精しく注意することになるのをあらかじめお断りしておく。

これまでに知られていた拓本で祠堂復元の目的に最も適わしいのはシャパンヌ・大村・関野氏等の著書に蒐められた各拓本である。

シャパンヌ本は第一石^⑩がよく、左右こそ少し切取られているが、画像の下に絡縄文帯が現われ、更にその下方に菱形文帯が続いているのが判る。フェアバンク夫人の復元^⑪図にもここまでき取入れている。

次に大村本では祠堂の奥壁をなす第三石の拓本^⑫が最も重要な資料となるもので、画像の下にシャパンヌ本第一石拓本と同じく絡縄文帯、菱形文帯が拓録されているのは従来唯一つの拓本であった。この画像下段中央のいわゆる宴享図と樹木の下に当る部分には文様が現わされていないのに気がつく。つまり、ここには何か台のようなものが接するように意図されていたために文様を現わす必要がなかったものと思われる、フェアバンク夫人もそのことを注意してい

る。又このことは、初めからこの部分が台か何かの裏にすることを彫工が熟知していたことを示し、祠堂の構造が極めて厳密に計画されていたことの一つの証拠となろう。

この拓本の図版は印刷が良好でないため、そのまま資料に使えないのは残念であるが、原拓本は現在東京芸術大学に保管されている武氏祠拓本中にあり、鮮明な良拓本で、過日、新教授と中吉氏の御好意で被見することが出来た。

祠堂の天井をなす祥瑞図第一石、第二石は共に画像の漫滅が甚だしく、画像の主題の判るものも数少ない。発掘されたときに、もうそういう状態であり、『石索』にもそのうちの十数図形をあげるにすぎない。従ってこの拓本の好資料は乏しいが、なかでは関野本の祥瑞第一石拓本^⑬が重要である。この拓本は横に三段に分けて祥瑞図形を描いた画像の下方に、横に長く画像のない部分が拓録されている。

図版には尺度が入っているので実測図と此べて見るとこれでもまだ石全体ではないが、それでもこの拓本のように祥瑞石の画像は石の上方に片寄っていることが想像されよう。

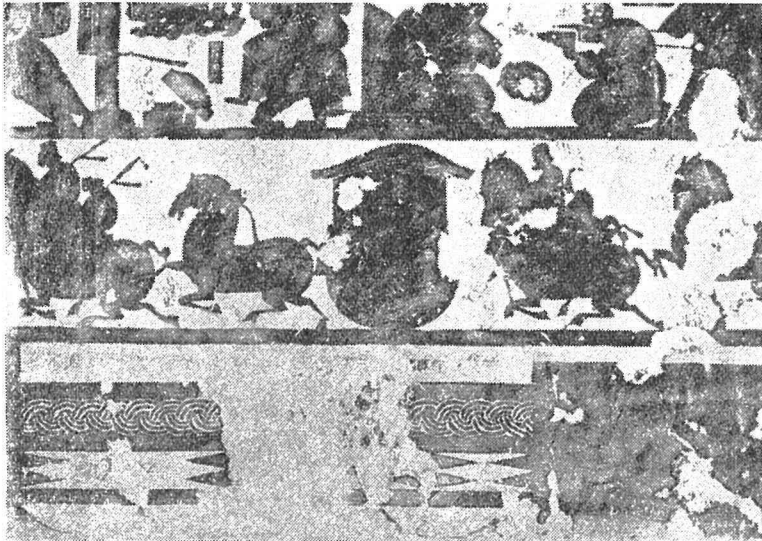
以上が従来から知られた材料と、それによる祠堂復元上の考察であるが、次に最近の調査によつて新しく見出した

た資料を紹介しよう。

それは早稲田大学付属図書館に所蔵される一連の武氏祠拓本（以下、早大図書館本と略称）で、台帳によれば明治四十年に文求堂より購入とあり、当時市島俊成博士によって蒐められたものかと思われる。

今ここで問題としている武梁祠堂は第一石の拓本が現在見当たらないのは不審であるが、第二石以下、祥瑞石にいたる四枚の拓本はすべてよくその原石のおもかげをうかがわしめる好資料揃いである。

武梁第一石から第三石までの、祠堂両壁と奥壁をなす三石を通じて画像の下方の裝飾文帯は上から、絡繩文帯、次に菱形文帯が続くことが、シャパンヌ本第一石、大村本第三石の拓本から判明していたが、この早大図書館本武梁第二石、第三石共に、この菱形文帯の更に下方に、画像の各層の間に見られると同じ連弧文が連なっているのが発見された（巻頭図版1、2）。これは従来のごとの拓本にもなかったもので極めて貴重な発見といえよう。他にわずかに東京国立博物館所蔵旧屋代本武梁第一石の拓本下方の文様帯にこの連弧文が見られるが（図版3）、これは実は武梁第三石



図版3 東京国立博物館蔵武梁第一石拓本（部分）車馬行列より下の文様帯は武梁第三石の文様帯を誤って貼付けたもの。

に属すべき文様帯の部分の誤まって第一石下方に貼りつけたもので、右方の文様のない部分は宴享図下方の部分に他ならず、その他、石の欠け具合などからもこの文様帯が第三石のものであることは間違いない。恐らく装束をする時にでも誤まって第一石下方に貼りつけたものであろうか。

早大図書館本の祥瑞石拓本の二葉も又、今の所他に比類のない貴重な拓本である。ことに祥瑞第一石の拓本（図版1—中上）は、石の長辺左右両端まで拓録してあり数々の新知見を得ることが出来た。画像の部分は上下七十糎、左右二〇二糎あり、その上辺と左右は各二糎巾、下辺の十五糎以上（ここで拓本が切れている）は石を磨いて美しく仕上げている。恐らくこの天井石を下から仰ぎ見た場合に室内になる部分を取りわけ美しく見せる配慮であらう。

縁取りをした画像の外側は左右共各々十七、八糎巾の荒削りのままの部分があるがこれはまさに第一石、第二石の東西側石の上部が接する部分なのである。ここで特記すべきはこの部分に長方形の穴が左右に各一ヶ所ずつあることである。左方の穴は巾十一糎、長さ十七糎の長方形で、右方の穴は巾は同じく十一糎で、長さは、石が多少損じてい

てはつきりしないがほぼ十六糎と推定できる。（図版2—左上参照）

側石上部に接する部分にあるこの長方形の穴が、側石上部に造り出された^榑榑を受ける^榑榑穴に他ならないことは容易に想像することが出来よう。この^榑榑と^榑榑穴の存在によって天井をなす祥瑞石が、屋根勾配の傾斜面におかれても、ずり落ちない様に工夫されていることが明らかとなった。

おのずから、武梁第一石と第二石の上部には三角頂部中央から左右それぞれ十八〜二十糎下がった所に長さ十七、八糎、巾十一、二糎の^榑榑が突出していることになる。（図版1—右、左参照）この部分はいま欠けているか、それとも黄易の新祠堂の壁面に埋め込まれているかして、従来見のがされてきたものであろう。

この^榑榑穴である所の長方形の孔については実は『石索』四の祥瑞第一石の記述の所に次の句がみられる。

……此（祥瑞石）前石有^二方孔^二、想其下有^二石柱^二承之、以^レ爲^レ固耳。

この『石索』の記述はすでに関野博士が注意され、フェアバンク夫人もこの『石索』の記述から石柱の存在を推定

している^⑨、けれども今この早大図書館本祥瑞図拓本を前にしては、この方孔が孝堂山祠堂の前面中央にある八角形石柱を承けるためのようなものでないことは明らかであろう。石の前縁に当る部分には全く方孔が見当らない。従来このように石全体を拓録した「良い拓本」がなかったがために、石索の「記述」をそのまま鵜呑みにして石柱の存在を推定するほかなかったのが、実は側石上の柄を受ける柄穴であることを明らかにし得たのは大きな収穫である。

この早大図書館本祥瑞石拓本によって、武梁祠堂の天井石が柄によって固定されていたことが判明したが、この柄が使われたのは武梁祠堂だけではない。今一度関野博士の著書の新祠堂内武氏諸石実測図^⑩を調べてみると「祠堂平面図」のうち左上隅にある「の」と「の」の石にそれぞれ小さな出っばりがつけられているのに気がつく。関野博士の本文にはこの二つの石が武氏祠諸石のうちのどれに当るか明らかにしていないが、関野博士の著書の図版66・67、シヤパンヌ氏の著書の図版 III・112などを詳細に検討した結果この「の」「の」の二石は前石室第八・第九石（一つの石の両面に画像がある）がほぼ中央から二つに折れたもの

と考えられる。これを復元してできる三角石梁石の上部両側にある長さ十糎ばかり、高さ五糎前後の出っばりはこれもまさしく天井石を支える柄に違いない。武梁祠堂のほかになくも前石室第八・九石の属する祠堂（フエバンク夫人はこの石を前石室上部中央において復元している）にも柄式の構築法が使われていた証拠になろう。

祥瑞石拓本のこの部分の更に外側は端まで祠堂の外に露出する部分であり、それに応じて、細い鑿痕の平行線を並べて美しく仕上げている（図版2―左上）。

祥瑞第二石も第一石と全く同様である。早大図書館本のこの拓本（図版1―中）は第一石と比べて左方がよけいに切られているが、その代り上方は画像の上部に二・二糎の磨いた縁取りがあつて石が終つてることが判る他、下部は画像の部分の下方、七糎巾の中広い磨いた縁取りの下が荒削りのままの部分となつている（図版2―左下）。拓本が切れているので、この荒削り部の中は七糎ぶんしか判らないが、祥瑞第一石のこの同じ部分が磨いて美しく仕上げられているのに対し、祥瑞第二石の方が荒削りなのは、ここが見えない部分、即ち、第一、第二石の側石上の状態と同

じく、奥壁をなす第三石の上部がここに接するためであるのに他ならない。そうすれば、前後に流れる祠堂の屋根をなす祥瑞石のどちらが前か後かはおのずから明らかである。画像祠堂の復元には各石の良い拓本を集めることが第一の作業になるのは勿論で、この章の始めに述べた通りであるが、次にこれらの資料を使って祠堂に復元するうえの参考とすべきものを挙げよう。

孝堂山石祠は漢代の房屋建築の唯一つの遺例であり、同じ祠堂である武氏祠堂群の復元にあつて最も重要な参考資料であることはいうまでもない。フェアバンク夫人が武梁祠堂復元の参考にしたのは勿論である。

この孝堂山石祠の拓本も又各書に著録されているが、実測図は関野博士のそれが従来唯一つのものであつた（第1図上）。

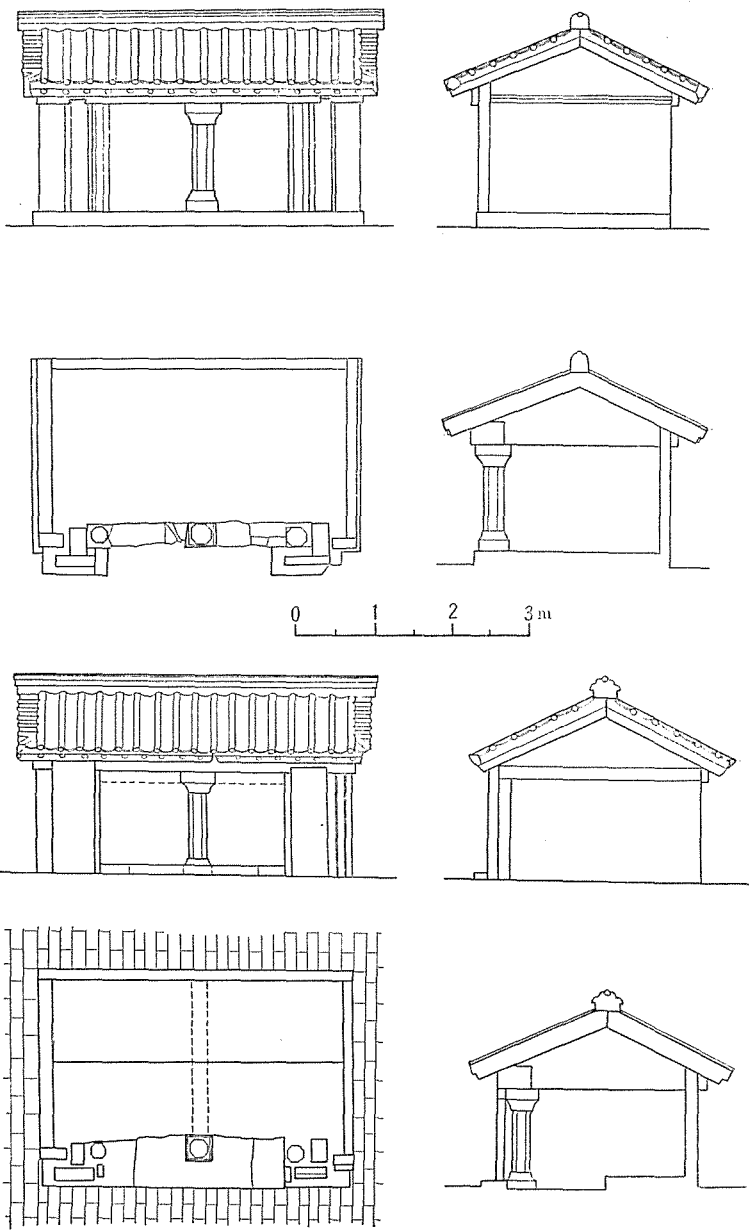
所で解放後、新中国の考古工作活動は実に目覚ましいものがあり、様々の重要な発見がなされたが、その整理が一段落した一昨年春、それらの中で最も重要なものを全国重点文物保護単位として、日本でいえば国宝指定がなされた。武氏祠画像石群、孝堂山石祠も勿論指定されたが、恐

らくこのためであろう、石祠は徹底的な再調査を受け後補の部分（構造上必要な所を除く）を旧に復するなどの保存工作が行われた。この調査の結果を羅哲文氏が『文物』の同じ誌上に精しく報告されており、画像の拓影の他、石祠の実測図（第1図下）も載せてある。武梁祠堂復元に重要なこの祠堂を関野博士の調査と比べながら以下少しく紹介してみよう。

外観上の最も大きな変化は棟である。（付記二）参照関野博士の実測図には立派な棟があらわしてあるのに羅氏の図には両側の天井石を突き合わせただけで何ら棟の設備がない。羅氏もこの点を注意して記述しているが棟のないのは如何にも不自然である。明器の建築でも、壁画、画像石等に現わされたものでも後漢代の建築にはすべて棟がある。これは関野博士の調査後、近年までの間に失なわれたもので、もとは当然あつたものであろう。

細かいことだが屋根上に刻み出された瓦の枚数が多少異なる。

正立面図も変化があるが、これは関野博士が正面左右の後補の立柱を省いて作図されたもので、博士の平面図には



第1図 孝堂山石祠実測図（上・関野博士図，下・羅哲文氏図〈『文物』
1962年第10期23頁により補訂〉）

黒く図示こそしてないが立柱のあることがわかる。

外形にその本質的な変化がないのに対して内部の様子は極めて与味深く、またこの部分に武梁祠堂の復元にあたっての参考資料が示されている。

関野博士が調査されたときには内部には奥壁に接して後補の台座が作られ、そこに郭巨の父母の像などが祀られていた。奥壁には上半分に画像が彫られているが、その真下までこの後世の台座が作られていた。^② 滞在期間の短いためもあったのであろう。あれほど精しい実測図をものされた博士も遂にこの台座には手をつけることなく、その台座の下は一面平らであると推測されたらしい。側面図には床が一直線に平らに描かれてある（第1図上側面図）。

所が解放後の徹底的調査によってこの後補の台座が除けられて見ると、そこには長方形の低い台石が室の奥半分一杯に置かれているのが発見された。羅氏はこれを「神台」と称している。この神台が祠堂と同時のものであるかどうかは羅氏の記述に「其形と彫飾より見れば、まさに原物に属す」とあるのを信ずるほかはない。

だがここに「彫飾がある」という記述に注目しよう。さ

きに武梁第三石の資料をあげた時に画像下段の中央部がわざと文様帯を現わしていなかったのを思い出して頂きたい。

孝堂山の神台の高さは図面から判断すると、約十八糎ほどである。もつとも羅氏も長い歲月の間に祠堂内部の床面が漫滅しているのを注意しているから、もとはもう少し低く十五糎ほどではなかったらうか。一方、武梁第三石のこの文様帯の部分の高さは約二十糎であるからほぼ同じ位といて差支えなからう。そして武梁祠堂の奥壁のこの部分に接して置かれた神台は孝堂山の例から推して奥壁に接する所を除いた三方の側面に、奥壁下部左右と同じく上から絡縄文、菱形文、それに新発見の連弧文の文様帯をめぐらしていたものと考えることが出来よう。石の上面については手掛りがない。

それではこのような石があるかといえれば関野博士によって注意されている石が一つだけある。それは博士の新祠堂内諸石の実測図中に^③の記号で現わされている石で、博士は「但^④には画像を有せず唯波文複菱文連弧文より成れる周縁を示せるのみ」と記している。^⑤ この石は長さ七十七糎（二・五五尺）巾二十五糎（八・二寸）でその表面に以上の

文様帯が横に長く彫られているものと思われるが拓本がないので充分なことがいえないのは残念である。関野博士のいう波文とは著書の後章により^⑨左右室第四・第五石下縁の文様を指しており、私のいう武梁祠の絡繩文を博士は糾繩文と名付けているから、この(尙)石は恐らく左右室に属するものと思われ、武梁祠のものを明らかにし得ないのは残念である。

以上で各石及び、参考資料が出揃ったからいよいよ復元に取掛かろう。

四 祠堂の復元

復元はまず祠堂を構成する各々の石を関野博士の実測図と拓本によって復元し、次にそれらの各石を組立てて祠堂の復元を行なうものとする。

a 第一石の復元(図版1-1石)

順序として第一石から取かかろう。関野博士の実測図によればこの石は左右が一三九・五糎(四・六尺)^⑩、高さは両端で一六四・五糎(五・四二尺)中央のもっとも高い所で一八二糎(六尺)である。将棋の駒のように中央が高くなっ

ているが、この最も高い所が丁度中央の位置かどうかは実測図には明確にしていえないが、図の書方、それと拓本からして中央に置く。

この第一石に彫られた画像の大きさはどうであろうか。写真が全くない現在、拓本によってその様子を見るほかに、先に資料を挙げた時にシャパンヌの拓本を推したが、寸法を実際に当る必要上今ここでは過日、東京芸術大学所蔵の拓本で調査した資料を使ってゆきたい。芸大本によると、画像の部分は左右一三六・五糎ある。ただしこれは石の端までではない。その外側に縁がめぐっているわけである。所で先の関野博士の実測図によれば左右は一三九・五糎でその差三糎しかない。そうすると第一石は左右ほとんど一杯まで画像があつたことになり、縁がめぐっているとして精も々一・五糎巾ということになる。

次は上部の三角形をした部分であるが、西王母を中心としたこの部分をすみずみまで拓した拓本がない。だが上部絡繩文のうえ高さ十七・五糎のこの三角梁部も拓本はほぼ一杯まであつて、やはり上辺左右にごく細い縁しか入らない状態である。

それでは残された下方であるが、画像の下に文様帯が何条かあることは既にシャパンヌの第一石拓影によって明らかである。芸大所蔵の第一石拓本は残念ながら画像の下以下は拓されていないので、この部分は早大図書館本武梁第二石拓本によっておぎなうこととし、この文様帯の部分をそっくり画像の下に継ぎ足すことにする。絡縄文帯、菱形文帯と連弧文帯からなるこの部分は連弧の下辺までで丁度二十纏あり、その上部、画像の部分を合わせて一五六纏（最上部三角梁部を除く）になり、石の外形が一六四・五纏であるから下辺に八・五纏画像のない部分が出来ることになる。ここに他の画像があるかどうかは今の所知する方法がない。だがこの連弧文が最下辺になるらしいことは、たとえば前石室第六・第七石の例によって推量出来よう。この最下端無文の部分は床に埋め込んで保強の役に立つ部分とするのが妥当と考えている。

b 第二石の復元（図版1—左）

第二石の石の大きさは関野博士によれば、左右が二分、すなわち五耗ほど短くなっているだけで高さは中央部、両端部とも第一石と変らない。

拓本による画像の部分は早大図書館本（付記二）参照）によると左右一三七纏で石と僅か二纏しか差がない。上下は三角梁を除いて一三五・五纏、それに第一石と同じく下辺に文様帯二十纏をつけ足して一五五・五纏で、石の外形一六四・五纏から引くと九纏の無文の部分が下方に出来ることとなる。

c 第三石の復元（図版1—中下）

第三石の大きさは関野博士の実測図には、左右二四三纏（八・〇二尺）高さ一六四・五纏（五・四三尺）を計る。

画像の部分を早大図書館拓本によって調べると、左右は二〇五纏、高さは下辺の文様帯を除いて一二七・五纏ある。しかしこの拓本には最上部の絡縄文帯が拓録されていない。これはフェアバンク夫人の復元図^⑩のように、上辺にも第一、二石と同じく絡縄文帯がくることは明らかであるから上辺と下辺にそれぞれの文様帯を付加すると、総高は一五五・五纏となり、下方は第二石と同じく九纏無文の部分が出る。これに対して、左右は約三十八纏もあまることとなる。この画像は左右とも一杯まで拓録してあるからこれ以上画像がないことは明らかである。

d 祥瑞図第二石（図版1—中上）

この石の大きさは縦九九・五糎（三・二八尺）横二八一糎（九・二八尺）厚さ二七・五糎（七・七寸）で裏面に祥瑞図を彫り、表面は『石索』のいうように瓦楞、つまり瓦屋根を模してある。

早大図書館本によると画像の部分は巾七〇糎、長さ二〇二糎である。天井石の祠堂内部となる部分の寸法をさめるものは、奥壁即ち武梁第三石の画像の左右巾と、側石即ち武梁第一、二石上部の斜辺の長さである。前者は先にあげた通り二〇五糎、側壁上部の斜辺の長さは実測七〇糎であつてほぼ祥瑞画像の大きさに一致している。祥瑞図画像左右の二糎巾の縁取りを考慮すると充分であらう。

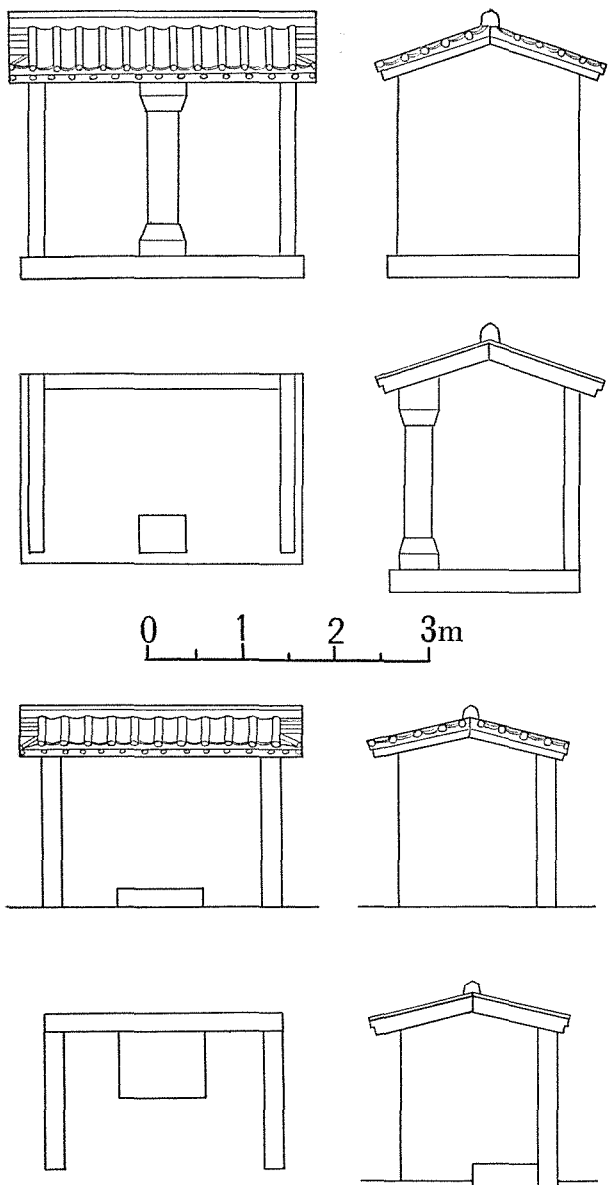
次に祥瑞第一石拓本上で画像の左右の方孔のある側石上部に接する部分の外側までを計ると二四〇糎で武梁第三石の長さと同じである。所が拓本の全長は二七五糎しかなく、関野博士の実測値より六糎短い。このことは祥瑞第二石においても考察するが、孝堂山祠堂の天井石の軒端は石表面の瓦屋根に対し、垂木を模した裏面が一段内側に引込んでいるが、武梁祠堂の天井石は左右両端においても

同じように石表面に対して裏面が一段と内側になっていると考えざるをえない。

e 祥瑞図第二石（図版1—中中）

石の大きさは関野博士の実測図によつて縦一〇四・五糎（三・四五尺）横二八七糎（九・四三尺）厚さ二一・二糎（七寸）ある。早大図書館本によれば画像の部分は縦六九糎、横一九八糎で画像の上辺に二糎巾、左右に各三糎巾、下辺に七糎巾の縁取りがめぐらされている。祥瑞第一石と同じく画像の左右に方孔があり、この方孔を含む側石上部の接する部分の外側間の寸法、すなわち、祠堂の外法は二四〇糎で第三石の長さと同じとなる。この外部、つまり祠堂の外になる部分は、拓本の右方は端まで拓録されており、この部分の長さは祥瑞第一石のそれと全く同一で、途中で切れている左方も恐らく同一の長さと思われる所から石表面の長さは祥瑞第一石、第二石共に二七五糎となり、石表面に対し左右各々六糎宛短かくなっていることになる。

関野博士の実測図によると、祥瑞第一石は祥瑞第二石より六糎短かいが、この差は恐らく、祥瑞第一石に述べたごとく、左右各々六糎宛短かくなっている石の表裏の差に起



第2図 武梁祠堂復元図（上・フェアバンク夫人図，
下・秋山図）

因するのではなからうか。したがって天井石の表面の長さは祥瑞第一石も第二石と同じく二八七厘としたい。

画像の下方七厘巾の縁取りの下に、磨かれていない部分があり、ここに第三石の上部が接することは前に述べた通りである。拓本がその半ばで切れているため祥瑞第一石と

同じく軒端の具合が判らないが、一応孝堂山祠堂にならうておく。

以上で各々の石の様子が判明した。次はいよいよ、それらを組立てて祠堂を復元してみよう。

f 祠堂の復元（第2図）

もとの祠堂の形制については、『石索』に復元的な記述がある。即ち、第一石と第二石をそれぞれ東西の側壁とし、第三石を後壁とし、祥瑞図二石で天井を覆うとしている。シャパンヌも関野博士も容庚氏も、フェアバンク夫人も皆それを踏襲している。第一石上部の三角梁部に西王母、第二石に東王父がある所から、第一石を西、即ち右に、第二石を東、即ち左方に置く点も問題ない。そうして描かれたのがフェアバンク夫人の復元図である(第2図―上)三石の組合わせ方、軒前縁中央の円柱などに関野博士による孝堂山祠堂調査の影響が色濃く出ている。

今この復元図に「再検討」を加えてみよう。(第2図参照)

第一に各石の組合せ方に注意しよう。フェアバンク夫人は第一石と第二石とで第三石の側面を夾むように組合わせて復元している。これは恐らく関野博士の孝堂山祠堂の石の組合わせ方(第1図―上参照)を踏襲したのであろう。だが先に各石の復元を行なった図(図版1)で判るように第一石、第二石とも左右はほとんど一杯まで画像がある。それに対して第三石は左右に各々十九種宛も画像のない部分がある。これではフェアバンク夫人のように復元したなら

ば折角の第一石、第二石の画像が一部分隠され、奥壁には、左右に画像のない部分が見えることになって極めて不自然である。

ここは第2図下のように第一石と第二石の側面に第三石が接するように組合わせれば、第一、第二石の画像はすっかり見えるし、第三石の左右の画像のない部分は第一、第二石の側面で隠され、画像がぐるっと連続するようになる。

それに羅氏の新しい孝堂山祠堂実測図には、ちゃんと奥壁が両側石の側面に接するようになっていたのである(第1図下)。短期間の滞在による関野博士の調査に多少の誤りがあるのは止むを得まい。同時にこれによって石の厚みも推定出来る。孝堂山祠堂と同じく外部からは「の字形に整然」とのえられていた筈であるから、第三石の画像左右の空白部は、そのままここに接する第一・第二石の厚さなのである。石の厚さは十九種となる。

第二は「神台」である。羅氏の孝堂山祠堂の新実測図(第1図下)に現わされた「神台」が武梁祠ではどうなっているであろうか。すでに指摘されている第三石宴享図下方の文様帯の現わされていない箇所こそこの武梁祠の神台

が接していた場所であろう。この神台が前方にどれだけ張出していたかは神台石そのものが発見されない限りは判らない。ただ一応孝堂山石祠の場合を参照してほぼ堂内の中央にまで出ていたとしておこう。先に左右室に属すると思われる(※)石が同じく神台関係の石である可能性を指摘しておいたが、武梁祠のそれは恐らく一枚石で、巾は第三石下部文様帯の無文の部分の長さと同じく九十三纏、厚さは文様のある所が二十纏、床に埋まる部分もいれて全体で二十九纏で、奥行きは五、六十纏となり、側面に文様帯をめぐらしたものと考えられる。

第三は前面中央の石柱である。先にも述べたように、この石柱の存在を推定しているのは『石索』の記述であって、フェアバンク夫人はそれと孝堂山石祠の八角柱を拠所として前縁中央に石柱を置いた復元図を作製したものと思われる。(第二図上) だが先に述べたように、早大図書館本の祥瑞図拓本によって、石索のいう方孔とは実は側石上部に作られた柄をうける柄穴であることが判明した。

現在もつとも良くこの祥瑞石の様子を示す拓本はこの早大図書館蔵拓本であるが、この拓本を精査しても、他に孔

らしいものは見当たらない。左右は両端まであるのに対し、下方は途中で切れていてなお十纏をあますが、この拓本になっていない前縁十纏巾の間に柱がくることは構造上あり得ないし、第一、十纏巾では石柱が細すぎて不自然である。そうすると祠堂前面は柱が一本もなく吹放しになっている結論となる。祠堂内部には中央に神台石がおかれているから前に柱があればかえって邪魔であるともいえ、この点からも柱のない方が自然であろう。

前面に柱がないとすると二米を越える空間が構造的に無理といえるかも知れないが、孝堂山祠堂の壁間はほぼ四米であるから、中央の八角柱によって分けられた片側の長さは武梁祠とほぼ同じ値となる。

また、このように柄でもって天井石をささえる構造は新発見である(図版1の第一、第二石は柄を補なって石の外形を描いた)。

五 結 び

武氏祠堂群のなかで、僅か五石から成るにすぎない武梁祠堂の復元は、いわば自明のこととされていた。だが拓本

のみをもつて行なつた従来の研究、ことにフェアバンク夫人の復元に對して、以上述べたとおり、関野博士による一つ一つの石の実測図を依所とし、その石のうゑに拓本による画像を定着させて各々の石をまず復元し、そうして得られた石をもつて祠堂を組立てるといふ新しい方法によつて、従来の見解を多少とも正すことが出来た。側壁、奥壁の組合わせに大きな修正を行なつたのはまさにこの新しい方法の成果といえよう。

前石室以下の他の祠堂の復元に、この新しい方法がどの程度の効果を現わすかは続稿にゆだねるが、関野博士の実測図にすべてを託すことも又一面的な見解となるのは勿論である。

寒威凛烈の二日間間の滞在では、むしろよくここまでと敬服せざるを得ないが、やはり複雑な形態をなす石については充分原形を描き切れないものもある。又他所にある石や所在不明の石についてこの方法を行ない得ないのはいうまでもなからう。

それらを補なうにはやはり拓本類の精査にまつ他ない。早稲田大学図書館蔵の拓本は武梁祠の諸石において従来の

どの拓本にも勝る重要資料であつた。第二石、第三石の最下辺に従来見のがされていた連弧文を見出だし石の下端を確定することが出来た。東京国立博物館所蔵拓本にもその一部分が見られる。

祥瑞図第一、第二石も早大図書館蔵拓本は又とない資料なのである。この両拓本で『石索』にいう「有方孔二」の方孔が実は枘穴であることが判明したほか、石の磨き具合によつて祥瑞第一石が前、第二石が後屋根となることも判然させ得た。この結果、祠堂前縁には柱が全くなく、吹放しであることを明らかにすることが出来たのも大きな収穫といえよう。

その他、新中国の目覚ましい考古工作活動による新しい材料にも期待したい。羅哲文氏による孝堂山石祠の調査報告は私の新しい方法による組立てに資料を与えただけでなく、いわゆる「神台」の存在を証拠づけてくれた。今後の調査研究の進展によつてあるいはこの武氏祠に対する精しい報告も行なわれることがあるう。そのあかつきには実物を見ることもなくただ文献や拓本を頼つた「隔海搔痒」のこの小論も大きな修正を必要とするかも知れない。それらも含

めつ、この小論に対する先学の御叱正をお願い申し上げます。
 (一九六二・六・十稿、十・二十三補)

末筆ではあるが本稿成立の機縁を与えて頂いた長広敏雄教授始め「漢代の美術と思想研究会」の諸先生、又資料の調査に多大の便宜を添けなくした東京芸術大学の新教授、中吉功氏、東京国立博物館の杉村勇造(現在御退職)、石田尚豊両氏、早稲田大学の小杉教授、附属図書館と特にその資料の重要性を教えて頂いた土居淑子氏等の御好意に深く感謝する次第である。又種々御教授頂いた林巳奈夫、杉本憲司両氏にもあわせて御礼申し上げます。

なお本稿は昭和三七年度文部省科学研究費(総合研究)「漢六朝の思想と美術」の研究成果の一部である。

- ① 陝西省博物館・陝西省文物管理委员会合編『陝北東漢画像石刻選集』(一九五九)、江蘇省文物管理委员会『江蘇徐州漢画像石』(一九五九)、曾昭燏、蔣宝庚、黎忠義『沂南古画像石墓甕編報告』(一九五六)その他。
- ② 武梁碑「……選採名石、南山之陽、擢取妙好、色無斑黃。前設罍甗、後建祠堂。良匠衛改、彫文刻画、羅列成行。撝勝技巧、委地有章。垂示後嗣、万世不亡。……」
- ③ こゝで取上げる祠堂が武梁のためのものかどうかは証拠がない。これを武梁祠堂と呼んだのは南宋洪适撰『隸釈』が始めてで、以来慣例として使われている。こゝでもそれに従った。又「祠堂」については長広敏雄「漢代の家祠堂について」(塚本博士頌寿記念仏教史学論集)(一九六一)参照。

④ Wilma Fairbank, The Offering Shrines of "Yu Liang T'u." (Harvard Journal of Asiatic Studies, Vol. 6, No. 1.) 1941——以下「フエバンク」と略称。

⑤ 馮雲鵬『金石索』(一八二二)——以下「石索」と略称、「大村西崖」支那美術史彫塑篇(一九一五)——以下「大村」と略称、関野貞「支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾」(『東京帝國大学工科大学紀要』第八冊第一号)(一九一六)——以下「関野」と略称——Chavannes, E. douard, La sculpture sur pierre en Chine au temps des deux dynasties Han, (1893) Mission archeologique dans la Chine septentrionale (1913)——以下「シヤバンヌ」と略称、容庚『漢武梁祠画像考釈』(一九三六)——以下「容庚」と略称、その他、武氏祠関係の文献は「容庚」巻末、「フエバンク」二頁に精し。

⑥ 「フエバンク」十二頁、Method of Reconstruction.

⑦ 「関野」本文九十二〜九十五頁、原石は現在東京大学工学部蔵
 ⑧ 長広敏雄「武氏祠左右室第九石の画像について」(『東方学報』第三十一冊)(一九六一)、林巳奈夫「戦国時代の画像紋」(『考古学雑誌』四十七〜三〇五)(一九六一〜二)参照。

⑨ 「関野」図版第五十一図

⑩ 「フエバンク」図版第六図

⑪ 註⑨、の実測図による各石の高さは、前二石右側面 二・九八尺、前六石 二・九一尺で五・八九尺。前一石 一・三尺、前四石 一・七尺、前十一・十二石 二・三四尺、前十五石 〇九三尺(「関野」石階の石) 又は前十三・十四石 二・三一

尺、前十石〇・九六尺〔閔野〕石階ゆ石）を足して六・二七尺となる。

⑳ 第二石第一層右端の二人の画像と第三石第一層左端の「楚昭真姜」図とは連続して一つの物語となっている。

㉑ 「シャバンス」図版第七十五図

㉒ 「フェアバンク」図版第二図

㉓ 「大村」図版第一三四図

㉔ 「フェアバンク」十六頁三〇六行

㉕ 「閔野」図版第五十六図

⑳ 閔野博士がその著書に引いている東京帝室博物館蔵屋代本がこれである。

㉑ 「閔野」本文三十七頁 ㉒ 「フェアバンク」十八頁

㉓ 「フェアバンク」十六頁 ㉔ 「閔野」図版第四図

㉕ 「第一批全国重点文物保护单位名单」〔三〕「文物」一九六一年第一、四・五期）

㉖ 羅哲文「考堂山郭氏墓石祠」〔一〕「文物」一九六一年第四・五期）

㉗ 「閔野」図版第七・八図

㉘ 「閔野」本文三十五頁

㉙ 「閔野」本文百四十頁以下参照。

㉚ 復元にあたって尺度はすべてメートル法で行い尺を併記した。

閔野博士の尺をメートルに移すとき、多少ののびちみある拓本を耗以下に正確に移すのも無意味なので一応五耗刻みに整理した。

㉛ 石索に「以意揣之、当年之制、不過五石而成一室。伏羲碑

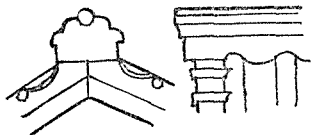
（第一石）与梁節始姉碑（第二石）中銳而旁殺、係室之東西兩壁、梁高行碑（第三石）正平而微低、係石室後壁。以祥瑞圖二石覆之、屋之前後頂、瓦楞在外、画像在内、可仰而窺也。……」とある。本文二頁の方孔の記述はこのあとになる。

㉜ 「閔野」緒言には武氏祠は二日間の調査とある。

〔付記一〕早大図書館蔵の武梁祠拓本が希に見る完全な拓本であることを御教示頂いたのは土居淑子氏からである。その後、小杉教授はじめ図書館の担当の方々の格別の御好意で調査を遂げることが出来た。始め拓本のままであったのを写真撮影のため、わざ／＼表装して頂いたが、土居氏らの充分な配慮にもかかわらず、多少原型より切縮められた部分がある。こゝに使用した寸法は、表装前に長広先生と御一諸に調査したときのものである。

〔付記二〕二この論考が完成したのち、「文物」

一九六二年第十期（二十三頁）に羅哲文氏が「考堂山郭氏墓石祠補正」を載せて前の実測図中、屋頂に棟のないのは誤りで、再調査によってこの石祠がやはり元来棟をもった建築であったと訂正している。それによると石祠の東半部屋頂上を約二十種巾に削ってこゝに棟石を載せるようにしてあった。第1図下の実測図は羅氏の下の訂正図により書き改めたものである。



（大阪城天守閣学芸員）

got rid of the speculative methods prevailing in the "Gilded Age." The reforming efforts in these natures were what big businesses were able to successfully adjust themselves to and therefore, it might be said, decided the direction toward big bureaucracy and state monopoly capitalism, the two main characteristics of contemporary America.

Reconsideration on Restoration of the Offering
Shrine of "*Wu-Liang-Tz'u*" 武梁祠堂

by

Shingo Akiyama

Among the stone reliefs in *Han* 漢, the stone reliefs of *Wu* 武 family 武氏祠画像石群 were the most famous ones from ancient times, but the former investigation has been concentrated on their subjects; it is not too much to say that restoration of the offering shrine, or *Tz'u-T'ang* 祠堂 by constructing the stones preserved by *Huang-I* 黄易 in the new offering-shrine has just started, the most excellent of which is Mrs. Fairbank's.

To consider carefully *Wu-Liang-Tz'u* 武梁祠堂 only, there were some aspects unable to be restored; at first, rubbings now in hand never show the whole shape, without figure belt and space carved nothing. Mrs. Fairbank's restoration by putting rear wall stones is corrected by putting side wall stones before rear wall stone. In the second place, by New China's careful reinvestigation of *Hsiao-t'ang-shan-tz'u-t'ang* 孝堂山石祠, the existence of stone-plinth was proved and also it was added to *Wu-Liang-Tz'u* 武梁祠堂. In the third place, the structure of ceiling-stone was shown by discovery of the rubbings in the Library of Waseda University, proved that the square holes according to "having two square holes" 有₂方孔_二, in "*Shih-so*" 石索 were draw-holes; thanks to this discovery, the central stone pillar in the Mrs. Fairbank's restoration figure is a mistake and it is proved to be the front-blow-off structure.